

留学報告書

UCL Summer School: Mental Health and the Mind (7/17-8/4, 2023)

The University of Tokyo

Yuki Saito

Tazaki 財団の皆様

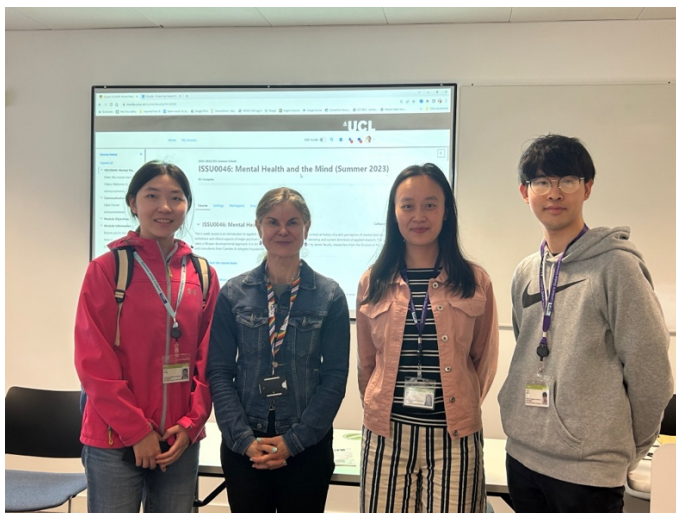
東京大学医学部健康総合科学科3年、GLP GEfIL 第8期の齋藤 優季と申します。この度は University College London Summer School への参加にあたり、多大なご支援を頂きありがとうございました。健康科学・公衆衛生を学習する中で世界の疫学をリードしてきた国である英国、特に公衆衛生の分野で高く評価される大学で学習する機会を得られたのは、非常に大きな学びとなりました。学業以外においても、博物館やミュージカルなど文化的な娯楽の場も豊富で充実した3週間を過ごすことができました。

サマースクールは、一般の英国の大学の授業と同じように、講義と実践（ワークショップやフィールドワーク）から構成されており、精神疾患に関する事象を多角的に扱われる授業に参加して来ました。うつ病や統合失調症といった疾患から、ダンスセラピーやフォトボイスなどの治療・研究方法、そして遺伝にいたるまで様々な分野について異なる教員の方から講義を受けました。専攻している健康科学では、公衆衛生に関連する分野を身体的なレベルから社会的なレベルまで横断的に学習しており、授業の進め方という意味で似ていたものの、扱う内容や視点が異なり、有意義な学びとなりました。

精神疾患に対する偏見の歴史を学ぶ上で、世界で最初にできた精神病院「王立ベスレム病院」に併設する博物館を見学できたのは大変貴重な経験になりました。精神疾患が歴史的にどのように差別され、どのように支援が増えたのか、スティグマの言語への影響、変化などを学習し、精神疾患の歴史を肌で感じることができました。一方、座学ではメンタルヘルスの社会的認識も国により、大きく異なることを様々な場面で実感しました。例えば、国により、精神病院の数や保険の適用など様々な場面で差が現れていることを改めて認識しました。

公衆衛生に関わる学習を東京大学の学部、GLP GEfIL、そしてこれから向かう交換留学で行う中で、精神疾患にフォーカスを当てたこのサマースクールは自分の学習の礎となるだけでなく、海外の大学院への興味を高めることにも繋がりました。これからもこの機会に学んだことを活かして、より勉学に力を入れたいと思います。最後になりますが、改めてご支援をいただき、ありがとうございました。

齋藤 優季



(左)UCL のモニュメントの前にて友人と、(右)教室にて教授・クラスメイトと